

ムカシの競馬を読む

平成16年・東京競馬場
ジャパンカップ
優勝馬:ゼンノロブロイ

© JRA



第113回 10年・20年・30年前の11月

今からちょうど10年前の11月には、ひとつの試みが中央競馬で行われていた。ジャパンカップとジャパンカップダートの同日開催である。平成16年11月28日、全11レース実施の第10レースとして行われたのがジャパンカップダート。アドマイヤドンが圧倒的人気を集めていたが、勝ったのはタイムパラドックス。外国馬ではトータルインパクトが4着に入った。2番人気だから人気を裏切っているのだが、後の外国馬の成績を考えるとよく走っているほうである。

続く第11レースがジャパンカップ。前走で天皇賞秋に勝っていたゼンノロブロイが優勝し、2着にも2番人気のコスモバルクが入った。3着は菊花賞から来たデルタブルースで3歳勢も検討したのだが、古馬の壁は厚かった。

気になる売り上げはというと、土曜と日曜合わせて480億円。



ムカシの競馬を読む



須田鷹雄

すだ たかお

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレ、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

土曜と日曜に分けてG1を実施していた前年は土日計508億円で、その形に戻った翌年は487億円。G1同日開催による增收効果は無かったようで、その後この形が試されることはなかった。

よく香港やドバイのように同じ日にG1を集中開催すべしというような論が出るが、G1に売り上げが集中する日本の特徴を考えると、それはリスクが大きすぎるよう思われる。

以上は「芝とダート」という2力テゴリにまつわる話題だが、「平地と障害」だと10年前の11月にはこんな記録が樹立されていた。11月14日付の「G2 第6回京都ハイジャンプ」は

「京都競馬場で13日に行われたJ・G2『第6回京都ハイジャンプ』は断然の1番人気ロードブリヴェイルが5連勝で重賞3連勝を飾った(中略)これで熊沢騎手は障害重賞10勝目(通算5人目)、現役3人

目)。平地重賞でも91年有馬記念(ダイユウサク)など13勝を挙げており、障害、平地両方の重賞で10勝達成は史上初となつた」

障害重賞は数が少ないので10回勝つは至難の業。現役騎手だと白浜(18勝)、高田(15勝)、西谷(15勝)、熊沢(13勝)、小坂(12勝)、横山義(11勝)の6人しか達成していない。熊沢以外に平地重賞を勝っているのは高田(神戸新聞杯・ドリームパスポート)だけで、他は最高でも3着までしかない。

逆に、平地重賞を勝っている騎手で障害重賞の積み増しも狙える騎手となると平地6勝・障害4勝の柴田大知騎手くらいだが、同騎手は昨年4月以降障害にのつていないので、現実的ではない。やはり熊沢騎手の記録は不滅・不倒のものとなりそうだ。

10年前の11月から、もうひとつこちらは脱力系の出来事を。11月28日で障害重賞を勝つまでの手際の良さがどうかしつぶれて、馬は止まらなかつた。21世紀に起きた事故とは思えないほど牧歌的な話である。これが同じ岩手競馬でも盛岡ではなく、水沢で起きたというのがどこかしつぶりともくる。

続いて20年前、平成6年から記録というわけではないが、「そういうえば昔はそうだったね」という話を。11月16日付の日刊スポーツか

ら引用しよう。

「ジャパンカップの日本代表馬選考委員会は、15日正午から東京・港区のJRA城山ビル37階の会議室で開かれた(中略)残る1枠については、1回目の投票で10票を獲得したフジヤマケンザンと、同じく9票を得たロイスアンドロイスの争いとなりた。ロイスアンドロイスについては、5歳で上昇度が見込める」といった意見があり、決戦投票の結果、10対8でロイスアンドロイスが5頭目の代表に決定、フジヤマケンザンは補欠となつた

省略してしまった部分では、セキテリリュウオー、ナイスネイチヤ、マチカネタ、ホイザマーベラスクラウンが満票で選出されたことが伝えられている。そもそもいまではこの手の「委員会」で出走馬が決まることが自体が無いが、昔は有馬記念の推薦枠などもあった。この制度自体が懐かしいものである。

たいていのケースは満票で決まるものだったが、この年は昭和62年に続くG1馬不在の年でもあり、先述したように委員会の票が割れ思つた。そこでおそらく、満票以外で選出された馬がジャパンカップの馬券に絡んだ唯一のケースではないと思う。とにかく紛争の種になりがちなこの手の会議だが、ロイスアンドロイスの資質を見抜いたこの年は

意味のあるものになつた。もっとも、セキテリリュウオーが回避したので最終的にはフジヤマケンザンも出走できたのだが。

この時期にはこんなニュースもあつた。11月28日付のサンスポから。「フジテレビが初めて試みるハイビジョン放送による『競馬中継』が27日、ジャパンカップを中心に東京競馬場から試験放送された。競馬工芸の野城TMが解説するパドック風景や、本馬場入場が映し出され、これまでの画像では見られない鮮明なシーンが放送された(以下略)。

当時はハイビジョン受像機が最も多く45万円、通常は80万円前後で、視聴世帯は少ないが実験放送の予算がついていたのでこの番組が成り立つた。

司会は亀和田武さんで、その後フジテレビの佐野アナを経て放送作家の大倉利晴さんとなり、BS開局で「競馬大王」となつたときから私が務めさせていただいた。「大王」になつてからは主に棕木TMが解説にあつたが、初期は野城さんのほか、千葉、藤牧、佐藤の各トラックマンが交代で解説にあつた。個人的にも懐かしい話である。

最後に30年前、昭和59年の11月からやはり映像に関する話題を紹介しよう。昭和59年11月

月27日付の中日スポーツから。

ニヨーメディアの進歩による高度情報化社会への対応を急ぐ中央競馬会は、その第一弾として12月1日から釧路、福島を除く全国18場外馬券発売所への映像伝送サービスを開始する。ファンサービスとしての全国ネットワークシステムは民間企業を含めても初の画期的な試み。今までラジオに頼つていた場外での全レースの実況、オッズなどの映像が提供されるわけだ。場内と場外の「情報格差」は一気に縮まる

この前年7月に場外馬券売り場の締め切り時刻が30分前→10分前と改善されていたのだが、今度は場外でも映像が見られるということで、当時を知るファンの方は画期的な出来事として記憶されているのではないかだろうか。

提供されるようになつたのはレース実況のほかパドック、馬体重、締切レースのオッズ、その他主要レースオッズなど。反対に言えば、30年ちよい前はこれらのもの全て無しで、場外馬券を売つていたわけである。この後、昭和61年には釧路にも映像伝送が行われ、ネットワークが完成した。

スマホでなんでも手に入る時代から見ると隔世の感だが、当時の技術水準はどうだったのだ。

日付のサンスピーパから引用しよう。

「岩手県水沢市の水沢競馬場で

27日、出走馬全頭が競走除外と

なる珍事が起きた。主催者の岩手

県競馬組合によると、問題が起きたのは10頭立ての第5レース(ダート1300メートル)。発走の際に1頭だけ、ゲートで前扉が開くのが遅れた(中略)発走委員は「真正な発走ではない」と判断。即座に発走

されることはなかつた。

(中略)発走委員は「真正な

発走ではない」と判断。即座に発走

されることはなかつた。